

## I 研究成果の紹介（第3回）

平成24年度の試験研究主要成果について紹介します。詳しい内容は、農業研究所ホームページにも掲載してあります。ぜひご覧になって下さい。

### 1. 年内加工にむけた干しいも主力品種「タマユタカ」糖化促進法

県内で栽培されている干しいも用カンショは、「タマユタカ」が主力品種ですが、晩秋が高温で推移する年は収穫後の糖化が遅れる傾向にあります。また、糖化の遅れは、年内加工時に品質がばらつく原因となります。そこで、年内加工にむけた「タマユタカ」の糖化促進法を確立しました。

◆「タマユタカ」の生いもは、貯蔵温度が低いほど糖化が早く進みます。一方、いもの腐敗は、貯蔵温度が低いほど早く発生します。試験の結果、収穫後の「タマユタカ」を10℃で約40日間貯蔵すると、大量腐敗を発生させることなく効率的に糖化を促進でき、年内に食味の優れた干しいもを安定生産できることが明らかとなりました（図）。

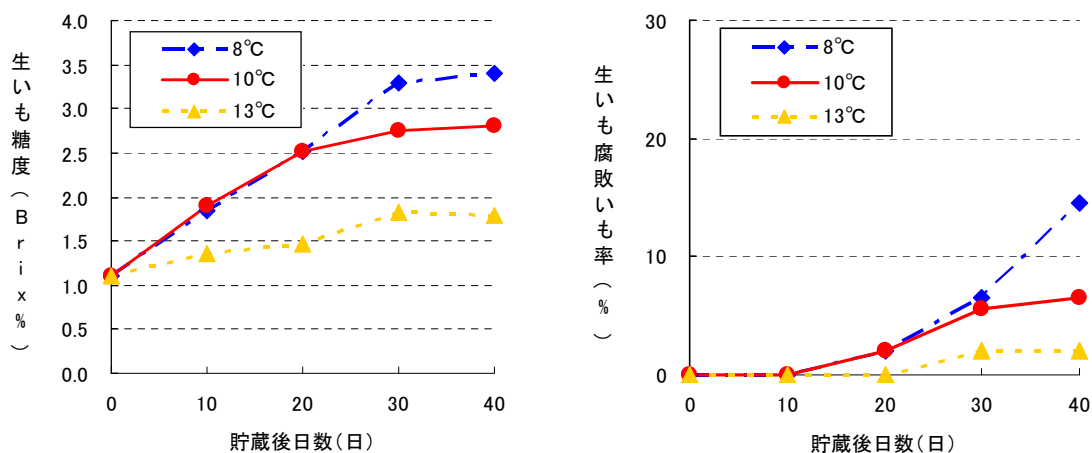


図 異なる温度条件下で「タマユタカ」を貯蔵した際の生いも糖度と腐敗いも率  
(平成23-24年試験結果の平均値)

【作物研究室】

## II トピックス

### 1. 水稻新品種「ふくまる」をテーマに、第3回主要課題現地検討会を開催

8月19日に生産者及び関係機関等の職員ら65名の参加者のもと、つくばみらい市において水稻新品種「ふくまる」（品種登録出願中）の全量基肥施肥技術を中心に、第3回主要課題現地検討会を開催しました。

#### ◆検討内容

現在、農業研究所では、「ふくまる」の高品質・良食味・多収栽培技術の確立に取り組んでおり、全量基肥肥料の肥効や適期収穫技術に関する研究成果を紹介しました。まず、「ふくまる」の全量基肥肥料の試験ほ場（つくばみらい市伊丹）において、生育状況の検討を行いました。そ

の後、つくばみらい市谷和原庁舎に移動し、農業総合センターの田中専門技術指導員を座長に全量基肥肥料の試験状況や適期収穫技術に係る研究成果等について検討を行いました。

会場からは「一日も早く、一発型肥料を開発してほしい」、「収穫適期技術は、ちょうど収穫前なのでタイムリーなテーマであった」、「ふくまる600kg/10aの確保、適正玄米タンパク質含量などの情報をこれからも現地で提供してほしい。」など多くの意見・要望が出され、活発な検討会となりました。



## 2. イネ縞葉枯病防除に関する試験について

近年になり、県西地域を中心にイネ縞葉枯病の発生が増加しています(図1, 2)。この病気は、ヒメトビウンカという害虫が媒介するウイルス病です。農業研究所では、縞葉枯病を効率的に防除するための現地試験を行っています。また、的確な防除を行うには、保毒虫率(ウイルスを持っているヒメトビウンカの割合)を調査し、あらかじめ発生を予測するとともに、水田での発病の有無を迅速に診断する必要があります。このため、保毒虫率やイネの発病を迅速・簡便に検定する手法についても開発試験を行っています(図3)。

縞葉枯病に感染したイネの刈株から再生してくるヒコバエも、同じように発病します。ヒメトビウンカの幼虫がこの発病株を吸汁してウイルスを獲得した後に、畦畔や土手の雑草で越冬し、翌年の伝染源となります。このため、早目に耕起しヒコバエが出ないようにして伝染源を少なくすることも、来年のための防除対策として重要です。



図1 縞葉枯病発病株



図2 縞葉枯病による出すくみ穂

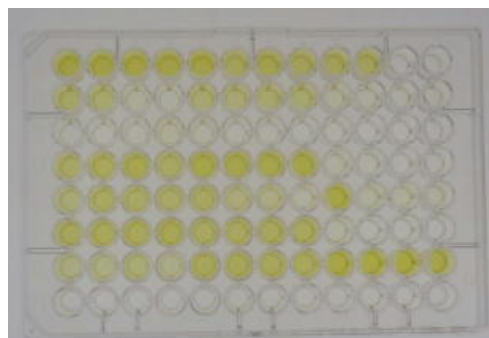


図3 エライザ法による縞葉枯病の検定  
(ウイルスに反応すると黄色に発色)

【病虫研究室】

編集・発行／茨城県農業総合センター農業研究所  
〒311-4203 水戸市上国井町3402  
TEL029-239-7211(代) FAX 029-239-7306  
水田利用研究室  
〒301-0816 龍ヶ崎市大徳町3974  
TEL 0297-62-0206 FAX 0297-64-0667  
Mail nouken@agri.pref.ibaraki.jp  
URL <http://www.pref.ibaraki.jp/bukyoku/nourin/noken/>